

## 研究報告

### 日本で育った日系青年のキャリア発達 —「転機」と「自分らしい生き方」との統合過程に注目して—

中村 夏帆(東京学芸大学教職大学院生)

#### 1 研究関心・目的

1990年の入管法改正から30年が経ち、日本で育った日系青年が働く姿を見るようになった。日本で義務教育を受けながらも、周囲との不均衡な関係や望まぬ進路、突然の失業や国内外の移動等、数々の困難や葛藤を経験する。このような経験の中で、日系青年はどのように自身のキャリアを発達させているのだろうか。本研究では、困難や葛藤を抱えながらも「自分らしい生き方」の実現へと歩む日系青年の語りを分析する。その成果から、自身の社会参画を意識し始める中学生年齢の子どもへのキャリア教育への示唆を得る。本報告ではその経過と分析結果の一部を紹介し、会場の皆さまより意見を頂きたい。

#### 2 先行研究

キャリア発達とは、「自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程(文部科学省2011:16)」である。日系青年の場合、上で触れた葛藤や困難の中で社会的な脆弱性という特徴を自身の生き方として統合しキャリアを発達させていると考えられる。齋藤(2009)は子どもにとって必要な力は「今」だけでなくライフコースという視点で捉えることが必要だと言う。児島(2013)は、在日ブラジル人青年が不安定な状態に陥る原因には、構造的不平等による不利な条件の累積という悪循環にあると指摘する。その悪循環から抜け出すためには、ライフコース研究の概念である「転機」を考える必要があるとしている。教師のライフコースを研究する山崎(2012)は、転機を「現在から振り返って語られた過去の生活構造の大きな変動の記録」(p.28)と定義する。本研究では、日系青年へのインタビューを「転機」と「自分らしい生き方」の統合過程に着目して、かれらのキャリア発達を描く。

#### 3 研究方法

調査協力者: Aさん 24歳 女性 日系ブラジル人 来日時5歳 ブラジル在住。協力者には匿名性の担保等の倫理面について説明し、データの利用について同意を得ている。  
調査方法: 2時間の半構造化インタビューを行い、録画・文字起こしデータを分析した。  
分析方法: インタビューデータをセグメント化し、コーディングした。本研究では、3つの転機について「自分らしい生き方」の語りを抽出し、日系青年という特徴をどのように「自分らしい生き方」に統合しキャリア発達をしたのか分析した。

#### 4 結果—各転機のストーリーライン—

**転機1 13歳～14歳 公立中学2年(日本) :** 学級中から無視される孤立経験をしたが、大人への援助要請を回避し独りで課題解決する経験の繰り返しをした結果、高い課題解決能力を得た。・心の支えは、いつも気にかけてくれる担任教師の期待に応えたい気持ちだった。また、思春期と言語の相違による親への相談の困難には、親と本人をつなぐポルトガル語指導教師が対応した。

**転機2 15歳～19歳 ブラジル人学校へ進学(日本) :** 経済的・学力的な理由で少ない高校の選択肢の結果、Aは親に決められたブラジル人学校進学をした。しかし、母語力不足による自己疎外感や母語力不足による授業の理解困難への焦り、母国の学校文化への違和感から精神的な限界があった。そこで、言語のみ学び直す必要があるという判断をし、校長に勉強をやり直す機会の直談判をするという、最適な言語学習環境の選択と要求、言語学習環境構築のための学費軽減の交渉をおこない、交渉の成功体験をした。

**転機3 24歳～現在 大学へ進学(ブラジル) :** 市のキャラクターを紹介するお姉さんとなったAだが、外国人へのステレオタイプ的な偏見やヘイトスピーチを受け、自分が市のキャラクターへの悪影響だと考えた。精神的な限界にあり、現実からの逃避をするように渡伯した。ブラジルでは、大学の記念受験をし大学進学を果たす。これにより、日本では考えられなかった自ら選択した専門職に就ける可能性と興味ある学問の学習機会を得たと考えている。・人に頼る方法の習得をしたAは、自己解決は自己成長の機会だと考え、現在は全ての経験は成長の種という信念を持っている。・困難が多い人生の価値付けをし、将来への期待を持つようになった。現在、日系児童生徒のことが理解できるSCの必要性を感じ、自身の具体的な進路計画を考えている。

#### 5 考察

周囲との関わりにより段階的に「問題を一人で解決することで成長する」「教師に心配してもらって生徒から、子どもの話を理解できる専門家へ」と転機を自分らしい生き方として統合している。それが、今の「もっと心理学の勉強をして進化し続けたい」「経験を活かして、専門家として子どもたちと関わりたい」というキャリア意識となっている。

##### 【引用文献】

児島明(2013)「ニューカマー青年の視点に立った移行支援の可能性—在日ブラジル人青年の「自立」への模索を手がかりに—」『異文化間教育』37巻, pp. 32～46

齋藤ひろみ(2009)「子どもたちのライフコースと学習支援」齋藤ひろみ・佐藤郡衛(編)『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて—』、ひつじ書房、pp. 251～265

文部科学省(2011)『中学校キャリア教育の手引き』

山崎準二(2012)『教師の発達と力量形成—続・教師のライフコース研究—』創風社